

各火山の 1 月の活動解説

【北海道地方】

雌阿寒岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

一方、ここ数年、地震増加、浅部熱活動の活発化を示す 96-1 火口の噴煙量増加や全磁力¹⁾ の変化などがみられていることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

十勝岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

一方、ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域²⁾ の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

樽前山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

一方、山頂溶岩ドーム周辺では、1999 年以降、高温の状態が続いているので、突発的な火山ガス等の噴出に留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

大雪山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

倶多楽〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

有珠山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

北海道駒ヶ岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

恵山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

【東北地方】

秋田駒ヶ岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

女岳^{めだけ}の山頂付近では、地熱域が引き続き確認されている。

地震活動は低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので今後の火山活動の推移に留意が必要である。

蔵王山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動に特段の変化はなかった。

蔵王山では、2013 年から 2015 年にかけて火山活動の高まりがみられた。その後も火山性地震や火山性微動が時々発生していることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

吾妻山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

大穴火口付近での熱活動は継続しているので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

山に入る際には、火山ガスに留意が必要である。また、大穴火口付近で噴出現象が突発的に発生する可能性があることに留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

岩木山^{いわきさん}〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

八甲田山^{はっこうださん}〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

十和田^{とわだ}〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

秋田焼山^{あきたやけやま}〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

岩手山^{いわてさん}〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

鳥海山^{ちょうかいさん}〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

栗駒山^{くりこまやま}〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

安達太良山^{あだたらやま}〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

磐梯山^{ぼんだいさん}〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】

草津白根山〔火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）〕

奥山田監視カメラ（湯釜の北約 1.5km）による観測では、引き続き湯釜北側噴気地帯の噴気孔から噴気が認められた。湯釜からの噴気は認められなかった。東京工業大学の監視カメラ（湯釜火口内）では、火口内に特段の変化は認められなかった。

湯釜火口及び水釜火口周辺の熱活動は高まった状態が継続している。全磁力観測によると、2014 年 5 月以降の湯釜近傍地下の温度上昇を示唆する変化は、2014 年 7 月に停滞したものの、温度低下を示唆する変化には転じていない。また、東京工業大学によると、2014 年以降、火山ガス成分や湯釜湖水の化学組成は火山活動の活発化を示す状態が確認されている。

小規模な噴火が発生する可能性があることから、湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがあるので、注意が必要である。

あさまやま **浅間山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]**

火山活動はやや活発な状態で経過している。

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上概ね 400m 以下で経過した。山頂火口で、夜間に高感度の監視カメラで確認できる程度の微弱な火映⁴⁾が 6～7 日、及び 21 日以降観測された。

今期間実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 1,500～3,600 トン（12 月：700～1,000 トン）と前月より増加した。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震はやや多い状態となっている。

2015 年 6 月上旬頃から 12 月にかけて、山頂の南南西にある塩野山の傾斜計⁴⁾でみられていた北または北西上がりの緩やかな変化が、2016 年 12 月頃から再びみられている。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要である。

にいがたけやま **新潟焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]**

山頂部東側斜面の噴気孔からの噴煙の高さは、火口縁上概ね 200m 以下で経過しており、引き続き 2015 年夏以前と比べてやや高い状態が続いている。

2016 年 5 月 1 日以降、振幅の小さな火山性地

震がやや増加したが、その後、火山性地震は次第に減少し、今期間の地震回数は 6 回だった。

GNSS⁶⁾連続観測では、2016 年 1 月頃から新潟焼山を南北に挟む基線で伸びがみられていたが、夏以降は停滞傾向が認められる。

今後も、想定火口内（山頂から半径 1 km 以内）に影響を及ぼすような噴火が発生するおそれがあるため、火山活動の推移に注意が必要である。

みだかはら **弥陀ヶ原 [噴火予報（活火山であることに留意）]**

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過した。

立山地獄谷では以前から熱活動が活発な状態が続いている。2012 年 6 月以降の観測で噴気の拡大・活発化や温度の上昇傾向が確認されているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

おんたけさん **御嶽山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]**

監視カメラによる観測では、噴煙活動に変化はなく、白色の噴煙が火口縁上概ね 500m 以下の高さで経過している。

山頂直下付近の地震活動は、回数は少ないながらも継続している。火山性微動は観測されなかった。

火口列からの噴煙活動や地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要である。

はこねやま **箱根山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]**

大涌谷に設置している監視カメラによる観測では、大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出しているのを確認している。大涌谷周辺での噴気の高さは概ね 500m 以下で経過した。

火山性地震は少なく、地震活動は低調に経過した。火山性微動は観測されなかった。また、地殻変動観測では、特段の変化は見られなかった。

大涌谷周辺の想定火口域では、噴気活動が活発なところがあるので、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

いずおおしま **伊豆大島 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]**

23 日に実施した現地調査では、中央火孔内の地表面温度分布に、前回（2016 年 12 月 16 日）の観測と比べて特段の変化は認められなかった。その他、三原山山頂周辺の噴気温度に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過した。震源は三原山周辺の浅いところと西方沖に分布している。

地殻変動観測では、短期的な膨張や収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いている。その他の観測データには特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

みやげじま **三宅島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】**

山頂火口からの噴煙の高さは、概ね 1,000m 以下で経過した。

5 日及び 13 日に実施した現地観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は 1 日あたり数十トン以下であった（前回 2016 年 12 月 6 日：数十トン以下）。

22 日に実施した現地調査では、主火孔内及びその周辺で引き続き高温領域が認められ、前回の観測（2016 年 12 月 9 日）と比べて、火口内の地形及び高温領域の分布に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過した。震源は山頂火口直下に分布しており、これまでと比べて特段の変化は認められない。火山性微動は観測されなかった。

主火孔における噴煙活動及び火山ガスの放出が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、山頂火口内⁷⁾及び主火孔から 500m 以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出が継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

にしのみま **西之島【火口周辺警戒（火口周辺危険）】**

西之島では、火山活動の低下が認められるものの、火口付近には高温領域が引き続き確認されている。火道域に海水が浸入した際には小規模な噴火が発生する可能性があることから、火口から概ね 500m の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。また、これまでの噴火で流れ出した溶岩は、内部が高温になっていると考えられるほか、海岸部では崩れやすくなっているため、火口から概ね 500m を超える範囲でも注意が必要である。

いおうとう **硫黄島【火口周辺警戒（火口周辺危険）及び火**

山現象に関する海上警報】

火山性地震は、やや多い状態で経過しており、特に 31 日に増加（日別回数 81 回）した。調和・単色型の火山性微動が 1 回（前回 2 回）発生した。これらの火山性微動が観測された時間帯に、その他の観測データに異常は認められなかった。

阿蘇台東監視カメラ（阿蘇台陥没孔の東北東約 900m）による観測では、島北西部の井戸ヶ浜からの噴気は認められなかった。また、島西部の阿蘇台陥没孔からの噴気の高さは概ね 100m 以下で経過した。

GNSS 連続観測によると、地殻変動は隆起及び停滞を繰り返している。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるので、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

ふくとくおかのぼ **福徳岡ノ場【噴火予報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報】**

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では噴火に警戒が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

なすだけ
那須岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にっこうしらねさん
日光白根山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

やけど
焼岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

のりくらだけ
乗鞍岳【噴火予報（活火山であることに留意）】

はくさん
白山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

ふじさん
富士山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

いずとうぶかざんぐん
伊豆東部火山群【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にいじま
新島【噴火予報（活火山であることに留意）】

こうづしま
神津島【噴火予報（活火山であることに留意）】

八丈島はちじょうじま [噴火予報（活火山であることに留意）]
 青ヶ島あおがしま [噴火予報（活火山であることに留意）]

【九州地方及び南西諸島】

九重山くじゅうざん [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められないが、GNSS 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

阿蘇山あそざん [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

中岳第一火口では、2016 年 10 月 8 日の噴火の後、噴火は発生していない。

火山性微動の振幅は、小さな状態で経過し、傾斜計⁸⁾にも火山活動に伴う特段の変化は認められない。

また、GNSS 連続観測では、2016 年 7 月頃から認められていた、草千里深部にあると考えられているマグマだまりの膨張を示す基線の伸びは、11 月中旬以降は停滞している。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2016 年 12 月は 1 日あたり 1,000～1,700 トンだったが、1 月に入り減少し、1 日あたり 1,000 トン未満となっている。

18 日に実施した現地調査では、中岳第一火口内で緑色の湯だまりを確認した。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が 2016 年 12 月下旬までやや多い状態で経過していたことから、引き続き火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性がある。

中岳第一火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流⁹⁾に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく、風の影響を受ける小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。また、火山ガスに注意が必要である。

雲仙岳うんぜんだけ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動に特段の変化はないが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

霧島山きりしまやま（えびの高原（硫黄山）周辺）[噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）] ←13 日に噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（活火山であることに留意）に引下げ

えびの高原（硫黄山）周辺では、2016 年 12

月 12 日に火山性地震が 70 回と増加したが、その後は 1 日あたり 5 回以下と少ない状態で経過した。月回数は 17 回と前月（2016 年 12 月：99 回）と比べ減少した。火山性微動は 2016 年 12 月 13 日以降観測されていない。

山体の隆起を示す傾斜変動は、2016 年 12 月 16 日以降観測されていない。

2016 年 12 月 16 日から同 31 日にかけて、一時的に噴火の高さが稜線上 100m 以上になり噴火活動の活発化がみられたが、その後は概ね稜線上 30m で経過した。

2017 年 1 月 11 日と 31 日に現地調査及び九州地方整備局の協力により上空からの観測を実施し、噴火や熱異常域に大きな変化がないことを確認した。

これらのことから、えびの高原（硫黄山）周辺の火山活動は低下しており、硫黄山周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められなくなったと判断し、13 日 14 時 00 分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベル 2（火口周辺規制）から噴火警戒レベル 1（活火山であることに留意）に引き下げた。

火口周辺では火山ガスに注意が必要である。活火山であることから、火口内で、火山灰、噴火、火山ガス等の規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、注意が必要である。

霧島山きりしまやま（新燃岳しんもえだけ）[火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

噴煙は火口縁を超えるものは認められず、火口内で消散した。

31 日に新湯温泉付近から実施した現地調査では、西側斜面の割れ目付近で引き続き弱い噴火が認められた。赤外熱映像装置による観測でも、引き続き弱い熱異常域を確認した。

火山性地震の月回数は 20 回（2016 年 12 月：5 回）と少ない状態で経過した。火山性微動は 2016 年 9 月 18 日以降、観測されていない。

傾斜計では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

GNSS 連続観測によると、新燃岳の北西数 km の地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015 年 1 月頃から停滞している。また、新燃岳周辺の一部の基線で、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

新燃岳ではこれまでも火山性地震が時々発生しており、火口内及び西側斜面では弱い噴火や熱異常域が確認されていることから、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

新燃岳では火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、新燃岳火口

から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石（火山れき¹⁰⁾）が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

桜島 [火口周辺警報(噴火警戒レベル 3、入山規制)]

桜島では、噴火は観測されていない。

昭和火口では、2016 年 7 月 26 日に爆発的噴火¹¹⁾が発生したが、その後はごく小規模な噴火も観測されていない。南岳山頂火口では、2016 年 8 月まではごく小規模な噴火が時々観測されていたが、同年 9 月以降は観測されていない。

11 日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、前回（2016 年 2 月 6 日）の観測時と比較して、火口周辺の熱異常域の分布に特段の変化はなく、火口底に顕著な高温部は認められなかった。

13 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は 1 日あたり 200 トン（2016 年 12 月 26 日：100 トン）と引き続き少ない状態であった。

17 日に実施した現地調査では、昭和火口近傍及び南岳南東側山腹で、これまでと同様に熱異常域が観測されたが、特段の変化は認められなかった。

火山性地震の月回数は 67 回で前月（2016 年 12 月：93 回）同様に少ない状態だった。火山性微動は観測されなかった（2016 年 12 月：なし）。

桜島島内での傾斜計、伸縮計¹²⁾による観測では、山体の膨張を示す変化は認められなかった。

GNSS 連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下のマグマだまりの膨張が続いている。島内では、2015 年 8 月の急激な山体膨張の変動以降、山体の収縮傾向がみられていたが、2016 年 1 月頃から停滞している。

桜島の噴火活動は 2016 年 8 月以降低下しているが、始良カルデラへのマグマの供給が継続していることから、火山活動が再び活発化する可能性がある。引き続き火山活動の推移に注意が必要である。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石（火山れき¹⁰⁾）が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

薩摩硫黄島 [噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)] ←5日に噴火警戒レベルを1(活火山であることに留意)から2(火口周辺規制)に引き上げ
薩摩硫黄島では、1 日から火山性地震が増加し、概ね多い状態で経過した。火山活動が高まっており、小規模な噴火が発生する可能性があること判断したことから、5 日 11 時 00 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 1（活火山であることに留意）から 2（火口周辺規制）に引き上げた。

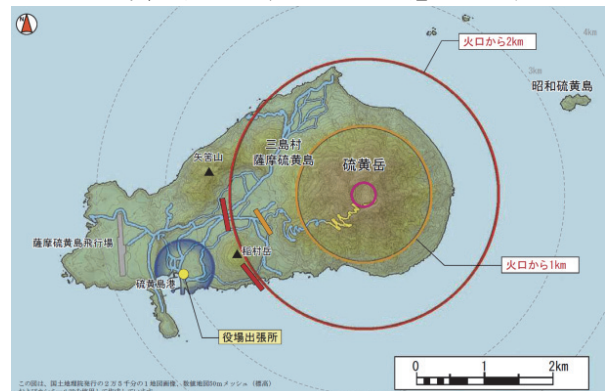
5 日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が鹿児島県の協力により実施した上空からの観測では、山腹から弱い噴気を確認し、前回（2016 年 5 月 31 日）の観測と比較して若干の噴気の増加が認められたものの、大きな変化はなかった。赤外熱映像装置による観測では、火口周辺及び山腹で熱異常域を観測したが、前回（2011 年 12 月 19 日）と比較して、熱異常域の拡大や温度の高まりは認められなかった。

10 日～12 日に気象庁機動調査班が実施した現地調査では、硫黄岳の北側から西側にかけて熱異常域を観測したが、前回（2016 年 7 月 4 日）と比較して、熱異常域の拡大や高まりは認められなかった。

火山性地震は、24 日以降は徐々に減少している。月回数は 1,109 回で前月（2016 年 12 月：147 回）より大幅に増加した。

地殻変動観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められない。

硫黄岳火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では降灰、風の影響を受ける小さな噴石及び火山ガスに注意が必要である。



薩摩硫黄島 警戒が必要な範囲（硫黄岳山頂火口から概ね 1 km の範囲）

口永良部島 [火口周辺警報(噴火警戒レベル 3、入山規制)]

口永良部島の新岳では、2015 年 6 月 19 日のごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。白色の噴煙は最高で火口縁上 600m まで上がった。

16 日及び 26 日に実施した現地調査では、これまでの観測と同様に新岳火口および新岳火口西側割れ目付近から白色の噴煙が上がっており、火口周辺の地形や噴気等の状況に変化はみられなかった。また、赤外熱映像装置による観測では、新岳火口の西側割れ目付近の熱異常域の温度は低下した状態が続いており特段の変化は認められなかった。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は 1 日あたり 70～300 トン（2016 年 12 月：100～200 トン）と、2014 年 8 月の噴火前よりもやや多い状態で経過した。

火山性地震の月回数は 51 回で、前月（2016 年 12 月：82 回）に比べて減少したが、引き続きやや多い状態で経過した。火山性微動は観測されていない。

GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

新岳火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。降雨時には土石流の可能性があるので注意が必要である。

諏訪之瀬島すわのせじま [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

御岳火口みたけでは、爆発的噴火¹³⁾は発生しなかったが、噴火が時々発生した。同火口では、概ね期間を通して夜間に高感度の監視カメラで火映を観測した。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

つるみだけ がらんだけ
鶴見岳・伽藍岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

きりしまやま おほち
霧島山（御鉢） [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

- 1) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
- 2) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
- 3) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
- 4) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
- 5) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。
- 6) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
- 7) 山頂火口内とは、雄山山頂にある火口及び火口縁から海岸方向に約 100m までの範囲を指す。
- 8) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
- 9) 火山ガスと火山灰等の混合物が、水面や地表面を高速で横方向に広がり、地表の物を巻き込む現象。人体や建物、船舶等に大きな被害を与える恐れがあり、とても危険である。
- 10) 霧島山・桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。
- 11) 桜島では、火道内の爆発による地震を伴い、爆発音、体を感じる空気の振動、噴石の火口外への飛散、または、気象台や島内の観測点で一定基準以上の空気の振動のいずれかを観測した場合に爆発的噴火としている。
- 12) 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。
- 13) 諏訪之瀬島では、火道内の爆発による地震を伴い、島内の観測点で一定基準以上の空気の振動を観測した場合に爆発的噴火としている。